

IV 花き

実況

1 キク

奥越では、秋植え夏ギクの6月14日の調査（昨年6月4日）で、「秀まこと」で草丈86.3cm（昨年78.3cm）、葉数54枚（昨年39.7枚）、花蕾径7.5mm（昨年6.4mm）、「白霧」で草丈79.2cm（昨年79cm）、葉数53枚（昨年49.7枚）、花蕾径7.5mm（昨年4.0mm）、「あかね」で草丈93cm（昨年76.3cm）、葉数52枚（昨年51.3枚）、花蕾径8.4mm（昨年5.3mm）であった。すべてエスレルを2回散布している。6月10日から出荷が始まっている。

病害虫として、ハダニ類、アザミウマ類が出始めている。

春植え夏秋ギクの6月19日の調査（昨年6月18日）では、「小鈴」で草丈41.5cm（昨年38.8cm）、葉数24枚（昨年25.8枚）、「精ひなの」で草丈45.0cm、葉数22枚であった。

病害虫として、一部品種で白さび病が少発生している（写真1）。

越の花生産組合の作見が6月15日、キク部会の目揃え会は6月24日に行われた。

福井市二日市では、春植え夏秋ギクの6月18日調査（昨年6月15日）で、「小鈴」の草丈が45cm（昨年23.8cm）、「花絵」で40～45cm（昨年33.0cm）、「小雨」35cm（昨年23.8cm）、「西の星」で45cmであった。「小雨」のみ、エスレルを2回散布した。

福井市東郷の春植え夏秋ギクでは、「小鈴」で草丈45cm（昨年38.0cm）、「恋心」で45～50cm（昨年32.8cm）、「西の星」で45～50cmであった。小鈴は4本仕立てが行われている。秋植えキクでは6月上旬から出荷が始まっている。

福井市大土呂では、「小紫」で草丈40～45cm（昨年33.5cm）、「小鈴」で40～45cm（昨年42.5cm）、ピンチ後にエスレルを1回散布している。

福井花卉出荷組合で5月29日に目揃え会、6月27日には作見会が行われた。

丹生の春植え夏秋ギクでは、6月11日の調査（昨年6月14日）で、「小鈴」では草丈29.9cm（昨年49.3cm）、「翁丸」48.2cm（昨年40.3cm）、「花絵」41.8cm（昨年35.7cm）で、エスレル処理はなかった。

病害虫は、特に発生していない。

越前市の春植え夏秋ギクでは、は6月14日の調査（昨年6月16日）で、「はじめ」で草丈52.1cm（昨年27.2cm）、「秀光」で51.3cm（昨年37.3cm）、「恋心」で58.7cm（昨年49.0cm）、「牛若」で58.6cm（昨年34.5cm）であった。エスレルは1～2回処理している。

病害虫として、一部圃場で、生長点付近にアブラムシ類による食害が認められた。

6月17日に南越花卉生産組合の作見会が開催された。

二州の春植え夏秋ギクは、6月14日調査で、「小鈴」の草丈が45cm（昨年62.8cm）、「花



写真1 白さび病の冬眠子雄と
黒さび病夏胞子

絵」で 35 cm（昨年 51 cm）、「翁丸」で 35 cm（昨年 48.6 cm）となっており、昨年より短めである。

病害虫として、一部圃場（品種）に白さび病が少発生している。

春植え 9 月咲きギクは、6 月 14 日調査で、「わかさ」の草丈が 5 cm（昨年 11.1 cm）、「映紅」で 6 cm（昨年 16.6 cm）、「おりがみ」で 7 cm（昨年 15.8 cm）となっており、昨年度より短めになっている。

病害虫として、一部圃場でネキリムシ類が多発生している。

若狭の秋植え夏ギクは 6 月 17 日の調査（昨年 6 月 18 日）では、「はなふさ」で草丈 114 cm、蕾径 6.6 mm（昨年 98.5 cm、6.7 mm）、「はじめ」で 99 cm、立弁（昨年 104.6 cm で立弁）、「とび丸」で草丈 96.4 cm、蕾径 7.4 mm（昨年 101.8 cm で立弁）であり、生育は昨年よりやや遅めである。病害虫は特に認められなかった。

春植え夏秋ギクの「くれない」で草丈 53.6 cm（昨年 53.2 cm）、「翁丸」で 60.6 cm（昨年 53.8 cm）、「しらかば」で 59.2 cm（昨年 53 cm）であり、生育は前年よりやや早めである。病害虫として、一部圃場でカメムシ類の食害痕が確認された。またアザミウマ類は微発生している。

9 月咲きギクは 5 月 20 日頃に定植され、「みゆき」で草丈 4.4 cm（昨年 5.8 cm）、「大信」で草丈 3 cm（昨年 5.8 cm）、「おりがみ」で草丈 4 cm（昨年 7.8 cm）であり生育は前年より遅くなっている。病害虫は特に認められなかった。

農業試験場の春植え夏ギクおよび夏秋ギクの定植は 4 月 4 日に挿し芽、4 月 18 日に定植し、5 月 7 日に摘芯した。6 月 6 日調査の草丈（脇芽長）は表 1 のとおりである。

表1. 農試圃場における生育調査(6月6日調査)

品種名	草丈 (cm)	葉数 (枚)	出蕾の有無	品種名	草丈 (cm)	葉数 (枚)	出蕾の有無
玉姫	24.8	15.8	○	精白浜	22.5	13.3	
はるか	24.4	14.0		シュウペガサス	21.3	13.3	
とび丸	25.3	13.8		牛若	23.8	13.8	
織姫	32.0	18.7		こずえ	33.8	18.5	
うたげ	21.8	18.7		さやか	28.3	15.5	
やよい	27.4	18.8		花絵	26.7	14.7	
はなふさ	17.7	16.2		あすか	29.8	15.2	
シャロット	25.7	12.5		白樺	25.8	14.7	
奥越の舞	20.8	17.0		新流星	25.2	7.8	○
かばちゃん	24.7	20.0		星の輝き	29.6	11.3	○
くれない	22.3	18.2		サマーゴールド	31.1	13.8	○
さきがけ	26.3	20.3		サマー3号	31.1	11.8	○
舞人	22.8	18.5		スーパーイエロー	25.8	13.7	○
さぼてん	24.2	22.5		夏紅車	34.5	15.2	
星の砂	34.6	20.7		砂浜	26.4	15.8	○
翁丸	24.2	19.2		清風	26.2	16.5	○
ひまわり	29.9	24.8		東海福祉	26.2	16.5	○
七夕かざり	33.4	21.0		精かげろう	33.9	18.2	○
はくよう	29.4	21.8		宝の山	27.1	17.0	○
ふくろう	27.2	13.8					

2 ユリ

奥越のシンテッポウユリでは、「F₁オーガスタ」の4月下旬定植実生苗が、6月20日の調査（昨年6月14日）で、草丈25.6 cm、葉数36枚で抽苔している。中心球の一部に葉枯病が発生している。

あわら市では、7月中下旬出荷用の品種「オーガスタ」が4月上旬に露地に定植され、抽苔が始まっている。大きい株では草丈が15~20 cmに生育している。揃いは良好である。8月旧盆出荷用の「オーガスタ」、「雷山3号」では、本葉5~8枚程度で抽苔はまだである。9月出荷用では本葉が3~6枚程度。いずれも活着は良好であるが、固定種である「雷山3号」はばらつきが目立つ。

病害虫は特に確認されていない。

3 スイセン

促成栽培の高温処理が6月18日および6月25日（昨年6月18日、2回目6月25日）に実施される予定である。小樟球根圃場では、6月26日から改植を予定している。スイセンボランティア（参加者約40名）が7月7日に梨子ヶ平の圃場において掘り取りと改植を予定している。

4 トルコギキョウ

あわら丘陵地の調査は6月14日に実施された。抑制二度切り栽培のレイナ系、ロベラ系他の品種では、2番花の草丈が70~80 cmで天花が開花始めである。昨年度よりやや生育は遅い傾向である。

2月定植・新盆出荷型栽培のロジーナ系他の品種では、2月20日頃に定植が完了し、草丈60~70 cm、天花、第二花房が見えだしている。

4月定植・旧盆出荷型栽培のファイナル系、PFソロ系他の品種は、4月下旬に圃場に定植された。草丈は20~30 cm、ロゼット株の発生はほとんど見られない。

病害虫として、抑制二度切栽培の個体で、アザミウマ類が部分的に少発生している。

越前市の6月14日調査では（昨年6月16日）、昨年夏に定植された二度切栽培用の「ボヤージュグリーン」、「レイナホワイト」で草丈77.0 cm、蕾長1.7 cm（昨年草丈77.8~81.0 cm、蕾長は1.5~1.7 cm）であった。

盆用の4月下旬定植作型では草丈22.7 cm（昨年22.5 cm）であった。

6月咲き作型の「ボヤージュグリーン」は一分咲き（昨年草丈91.7 cmで収穫前半）、「ロジーナグリーン」では草丈86.0 cmで二分咲き（昨年95.7 cm、蕾長2.8 cmで収穫開始）、「プティフル」では草丈72.0 cm（昨年草丈69.3 cm、蕾長1.4 cm）であった。

病害虫は特に認められなかった。

二州では、盆出しの作型の品種が栽培されている。6月14日の調査では、美浜で草丈25~35 cm、敦賀市で40~45 cmであった。

病害虫としては葉先が枯れる症状は微発生している。カルシウム欠乏の可能性もある。

若狭では、8月咲き品種が4月5日~10日にかけて定植され、6月17日の調査では草丈は32~40 cmであった。9月咲き品種は6月10日に定植が行われた。

病害虫は特に認められなかった。

5 その他

あわら市のアスターの「ステラ系」「あずみ系」他の品種で、電照促成作型（3月下旬定植）は、6月10日くらいから出荷が開始された（昨年6月15日）。旧盆出荷用の品種は4月下旬に定植され、6月14日の調査では草丈15cm程度である（昨年10～15cm程度）。

あわら市のストックの夏播き秋冬どり栽培において、JA 芦原ストック部会で6月7日（昨年6月13日）に播種検討会を開催し、前年度実績と播種計画、品種特性について意見交換がなされた。

対策

1 梅雨期の圃場排水の徹底

梅雨期の長雨が続くと、根の障害が発生する。そこで、畝の再整備を実施し、冠水しやすい圃場で栽培している場合は、畝溝とこれに交わる集水溝、排水路の溝さらえや清掃、除草を十分に行う（写真2）。

逆に、乾燥気味の気候が続いている場合、畝間灌水を行う。下葉の1/3が朝方から萎れている状態であると、畝間灌水を行う必要がある。夜温が高いときは畝間灌水をなるべく行わない。

実施前に溝さらえ、通路の清掃、土寄せ等を行い、スムーズに水が走るようにする。畝間灌水は、圃場が湿田で排水が悪い場合は、走らす程度、そうでない場合は通常の灌水を基準とするが、夕刻～早朝までとし、明朝の10時には完全に水が落ちているようにする。



写真2 陽が昇っても水が抜けない圃場

2 梅雨期の病虫害防除の徹底

1) キク黒さび病

梅雨期の湿潤な季節に多発する。白さび病と異なり、比較的高温でも発生が続くため断続的に発生が続く。

日当たり、風通し、排水をよくする。病葉は見つけ次第摘除する。治療剤としてはマネーヅ乳剤しか登録されていないため、予防剤として有機硫黄系剤（兼商ステンレス、ジマンダイセン水和剤、エムダイファー水和剤）の散布を励行する。兼商ステンレスは葉害に注意する。

2) 白さび病

気温17～25℃の湿潤な環境下で発生しやすい。草丈50～60cmまでは予防剤として、ジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブルなどで1週間に1回散布をする。散布時期は雨前が基本であるが、発病が多い場合は、雨の止み間に、チルト乳剤25、アンビルフロアブル、マネーヅ乳剤や、ストロビルリン系（ストロビーフロアブル：品種によって葉害の恐れがあるので他剤の混用を行わず、展着剤も加用しない）の治療剤を散布する。散布にあたっては耐性菌の出現抑制のため、同一系統の薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤を用いたローテーション防除を行う。ハチハチ乳剤も白さび病に登録がある。

3) キク黒斑病・褐斑病 (写真 3)

発生は、降雨との関係が強く、摘心後に降雨が多い場合には早くなる。高温多湿の条件で感染が拡がり、降雨等による土壌の跳ね上がりも下葉への感染が助長されるため、例年被害が多い品種は、梅雨前に下葉かきを行う。病葉は、二次感染を防ぐために、見つけ次第摘葉し、圃場外で処分する。

防除薬剤として、生育初期にダコニール 1000、ストロビーフロアブルやベンレート水和剤の散布を行う(表 2)。



写真 3 黒斑病から下葉が枯れあがった株

表 2 黒斑・褐斑病に登録のある薬剤例

殺菌剤名	希釈倍率	使用回数	備考
サンヨール乳剤	500 倍	8 回以内	葉害注意、有機銅剤
ストロビーフロアブル	2,000～3,000 倍	3 回以内	白さび病にも登録があるが、耐性菌に注意する
ダコニール 1000	1,000 倍	6 回以内	耐性菌が出にくい
ベンレート水和剤	2,000～3,000 倍	6 回以内	

4) アブラムシ類

高温となる夏は一時的に数が減少するが、葉裏など、雨水の当たらない葉裏での繁殖に注意する。同一系統の薬剤の連用は抵抗性個体の発生を促すため、系統の異なる薬剤を計画的に使用する。とくにワタアブラムシ(写真 4)は一生のサイクルが短く抵抗性がつきやすいので注意する。圃場の周辺から侵入するので、周辺雑草の抑制を行い、圃場内の植物体をよく観察し、個体数の少ない初期の防除を心掛ける。種類によっては、生長点付近のみ発生するもの、葉裏を主体とするものがあるため、噴口を多方面から植物体に向けて噴霧し、薬剤の撒きムラを避ける。

防除薬剤として、ウララ 50DF、アーデント水和剤などを散布する。



写真 4 ワタアブラムシ

5) ハダニ類

梅雨明け後の乾燥する夏場に発生が多くなるので、梅雨の期間中に 1 回と梅雨明け前に 1 回散布すると効果がある。薬剤の連用によるダニ類の薬剤抵抗性を抑えるため、系統の異なる殺ダニ剤を使用し、生育密度が低い時点で殺卵効果のある薬剤を散布する。圃場の周辺の除草を行い、圃場内への侵入と繁殖を抑制する。特に、下葉の裏に十分薬液がかかるよう、斜め上向きに噴口を向け、散布する。

6) カスミカメムシ類 (写真 5)

秋植えの 6 月咲きギク等の未収穫株が発生源となるので、圃場内に花を残さない。羽のない幼虫が多くを占めると思われる 6 月中下旬にローテーション防除を行う。特に蕾や花に成虫が集中するので、蕾や花がついたものは注意する。

防除薬剤はスミチオン乳剤かダントツ水溶剤、スタークル顆粒水溶剤(アルバリン顆粒水溶剤、)がカメムシ類に登録がある。日中になると成虫の飛翔が活発となるため、早朝に防除を行う。5 月下旬～6 月上旬には、成虫に対しての薬剤を必ず散布する。



写真 5 コアオカスミカメムシ



3 夏秋ギクの品質向上対策

1) 追肥

止め肥の施用時期は開花時期から約 50 日前ぐらいであるので、施用後、梅雨時期の降雨が多い年では、生育後半に肥料が切れる場合がある。葉色が落ちた場合は、速効性の化成肥料を少量施用する。ただし窒素肥料が効きすぎると白さび病が発生しやすくなるのでやりすぎない。

2) 下葉かき

薬剤散布しても地際部の葉裏には十分に薬液がかからない。さらに病害に侵されてい

る場合は、感染源として残りやすい。風通しをよくして、ムレを防ぐとともに、病害の下葉からの伝染を防ぐため、全体長の5分の1程度の下葉を除去する。除去した葉は圃場に放置しないで、圃場の外へ搬出する。

ハモグリバエ類幼虫の食害痕が黄変している場合は、必ず葉をとりのぞき、圃場外で処理する。

3) 開花促進方法

ジベレリンの水溶液を散布することで、キクの開花が促進される。花首が伸びやすい品種には用いない。登録された使用方法を守る。

剤名	使用濃度	使用時期	使用方法及び注意事項
ジベレリン水溶剤 ジベレリン液剤	25～100ppm	生育期	茎葉散布 50～100ℓ/10a、使用回数 2回以内。

4 スイセンの管理

1) 促成栽培の球根管理

斑点病（写真 6）の発生がひどかった圃場の球根はなるべく用いないようにする。高温処理、エチレン気浴処理後はできるだけ涼しい納屋などで保管する。乾腐病等の病害が発生している球根は適時取り除く。



写真 6 スイセン斑点病

2) 促成栽培の定植後の管理

発根と発芽を促すためスプリンクラーや灌水チューブなどによる散水を行うとともに遮熱ネット等での減光、敷きわら設置で地温を極力低下させる。

3) スイセン葉先枯病がひどかった圃場では、太陽熱消毒を実施する。甚大な被害があった部分に透明マルチを被覆し、土などを掛けて密閉し、梅雨明け後から1か月程行う。

5 ストックの播種と育苗

1) 播種

平坦地では7月下旬播種を目安に準備を進める。発芽適温は20～25℃の涼温を好むため、酷暑期は発芽が悪くなる場合がある。特にアイアンシリーズは発芽が悪くなる。

2) 播種用土

清潔で粒子の細かく揃ったものを準備し、覆土は発芽を揃えるため均一な厚さにする。用土中の肥料分を少なくすると、葉色が薄くなって、鑑別がしやすくなる。

3) 八重鑑別

八重率を高めるため、必要な苗数の3倍量程度の種子数を播種する。セル成型トレイに播種する場合、2～3回鑑別する。第1回目は、播種7～8日後に発芽が遅れたラッパ型の奇形葉を抜く。2回目は淡い葉色で子葉が長く、大きいものを残す。最後の3回目は生育不良株を除去する。

4) 播種後の管理

雨よけ下で行い、高温対策のためにハウスの外側に遮熱ネット等を張る。育苗箱はベンチ等の上に置き風通しを良くし、灌水は地温の低い早朝に行う。

5) ストックの苗立枯病と苗腐病

立枯れ性病害が発生した場合は、被害株を抜き取り、病原菌を調べる。苗立枯病（リゾクトニア菌）では、発病株を引っ張ると、地際からちぎれるが、苗腐病（ピシウム菌）の場合は、引っ張ってもちぎれずに根がついてくる。

6) 直播栽培

播種時の地表面の温度を極力下げるため、70～80%の遮光資材をハウスの外側にかけて、風通しを良くして地温の低下に努める。播種後は土を乾かさないように絶えず灌水する。徒長防止のため、発芽したら、遮光資材を5～7日以内に取り除く。

6 ハボタンの播種

- 1) 7月中下旬にセル成型トレイ 200 穴やペーパーポットを用いて播種する。高温期の播種では、遮光 30%程度で行うが、徒長しやすいため、かん水は必ず午前中に行い、遮光ネットをこまめに開閉する。
- 2) 切り花の場合、播種 20 日、本葉 4 枚程度の若苗で定植を行うと草丈が伸びる。直播は、12～15 cm ネットの枠に 2 粒落とす。

参考：アメダスの気象データ



